

かささぎ 通信 第58号

2017年 7月 14日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一七年六月の「森三郎の作品を読む会」では、先月に続いて、『赤い鳥』昭和11年10月号（鈴木三重吉追悼号）に所収の森三郎作品を読みました。

「鈴木三重吉追悼号」に掲載されている森三郎作品の内、六月は前の月に読み残した次の五作品を読みました。

【三味線橋（童話）】小林七葉、写真機（童話）小松淑郎

【兔ちゃんとキャベツ（童話）】村尾茂、烏瓜（童話）早川

七郎、【珊瑚ちゃんへの志願（赤い鳥の歴史）】森三郎

「三味線橋」というのは、実際に、東京の青梅街道から新井薬師へと至る古道にかけられた橋にそのような名があるそうです。中野区による「三味線橋の由来」には「橋の名は、このあたりを通るといつも近くの家で弾く三味線の音が聞えてきたからだと言われています。」と書かれています。森三郎は子どもの頃から、家の近くで三味線の音を聞いて育ったのではないかと思います。「目ぐすり」【赤い鳥】昭和7年3月号）の中でも女の子が弾く三味線が重要な役割を持っていました。森三郎は「三味線橋」の名に懐かしさを覚えたのではないのでしょうか。この橋のたもとで転んで、おつりを落としてきた少年が、夜それを探しに行きます。でも「あの橋にはお化けが出るって。」と姉さんに言われて、途中で引き返してきます。三郎は後に刈谷の巡検橋をモデルにして「ジャンケン橋」【幼年童話集 帽子に化したクロネコ】昭和24年初出、『森三郎童話選集 かささぎ物語』刈谷市教育委員会編・平成7年 所収）という童話を書いています。その中の、夜更けに橋を通ると出てくるジャンケンぼうずの発想はこんなところにあっただりませんか。

「写真機」は女学校の入学試験にパスしたら褒美を買ってもらえることになり、五円二十銭の東郷カメラのヒーロー号に決めるという話です。この東郷カメラというのは、

文房具店で扱われていて、廉価で求められたものようです（「広告にみる国産カメラの歴史」アサヒカメラ編集部・編1994）。三郎さんが知っていたかは分かりませんが、このカメラを製作していた東郷堂製作所は同じ愛知県の豊橋市にあったということも面白いことです。【兔ちゃんとキャベツ】は『赤い鳥』創刊号の清水良雄の表紙「お馬の飾」の再掲（白黒画面）と見開きになるように編集されています。兔ちゃんは「青い鳥の羽のついたお帽子に赤いビロードのおべべに白いズックのお靴」を身に付けてロバの背中に乗って町を通ります。それはまさに創刊号表紙の絵柄の再現ではないでしょうか。そこには、兄の銚三が持ってきた創刊号の表紙を家族みんなで見た時のあの原点にもう一度立ちたいという思いさえ感じられます。【烏瓜】には「大きな栗の木の下で、あなたとわたし」と歌う場面が出てきます。川崎洋著『大人のための教科書の歌』（1998）には「終戦後、進駐軍の兵士たちが日本に持ってきたものを、聞き伝えて歌い出したという。」と注が付けています。しかし、昭和11年にはすでに歌われていたのだと分かります。

【珊瑚ちゃんへの志願】で、森三郎は鈴木三重吉子息の珊吉氏に「先生の衣鉢をついでの復刊」を期待する言葉を書いています。三郎がどんな思いで『赤い鳥』編集記者として最後の仕事をしているか想像すると、胸が痛くなる思いです。またこの文章では、「角兵衛獅子」（昭和9年3月号、通信第14号参照）の中のカルピスの看板の話が出ていますし、「桶狭間の戦」（昭和7年6月号、通信第41号参照）は鈴木三重吉からの要請で書いた作品であったということも分かります。

次回予定

- ①「ローズ・ファイルマンの作品を読む会」（講師・鈴木哲氏）
7月21日（金）・8月4日（金）、中央図書館視聴覚室
- ②「森三郎の作品を読む会」（8月は休会）
9月8日（金）午後1時半〜3時半

『赤い鳥』に掲載の森三郎作品を読み返します。

「城下町」【季刊 新児童文化】復刊1号、昭和二十一年八月